

映像制作実習Aのレジュメ

カット割り……映像の基本構成要素はカット

多くの人は、映画やドラマをひとつつながりの物語として見ています。しかし実際は、バラバラに撮影されたカットがパズルのように並べられているだけであり、それが、つながっているように見えているにすぎません。今日は、カット編集を中心にしてドラマ演出を分析してみようと思います。ひとつひとつのカットを意識すると、作り手の意図や苦労が類推できるようになります。

●堤幸彦『愛なんていらねえよ、夏』（2002年）第2話（3分半）

駅のホーム。スタイリッシュでカッコいいモンターージュの代表例。

●川村泰祐『ランチの女王』（2002年）第8話オープニング（2分）

森田剛の乱闘シーン(1カメラ撮影)。全5分間のシーンで約170カット。1カットあたり、平均1.76秒。
このシーンを撮影するのに、ほぼ1日かかっていると思われます。

●福澤克雄『3年B組金八先生』（2002年）第6シリーズ第18話ラスト（1分半）

上戸彩の乱闘シーン(ほぼマルチ撮影)。全3分間で約95カット。1カットあたり、平均1.89秒。
お芝居重視の演出をすると手の込んだカメラワークはできない。
1カメラ撮影——カメラワーク重視 芝居が断片化される。最近は、2カメラの場合が多い。
マルチ撮影——芝居のライブ感を重視 カメラワーク(アングル)が制約される。

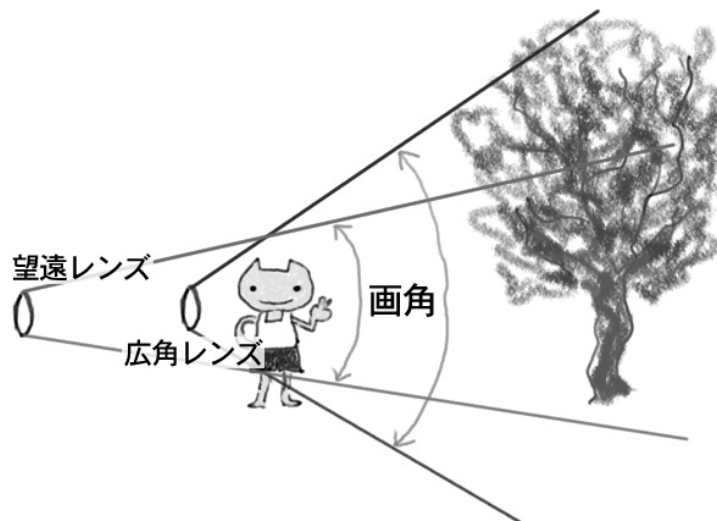
●羽住英一郎『伝説の教師』（2000年）第7話（2分半）

ここからは、脚本の内容とカット割りの関係に着目して話を進めます。カット割りは、野球におけるピッチャーの配球に似ています。演出家は、決めのカット(決め球)が強烈に見えるように、各カットを配列します。このシーンの決めのカットは米花剛史のアップ。米花くんを極力映さないようにカットを配列してあって、決めシーンで彼のアップがド〜〜と入るので、強いインパクトが生まれます。

●森嶋正也『弁護士のくず』（2006年）第9話（5分）

喫茶店で、岡本麗が離婚届に印を押そうとすると映画『追憶』の主題歌が店内に流れる。カット割りの構造は上の『伝説の教師』と同じ。どんな決めのカットがでてくるのか予想してみよう！ トヨエツ弁護士が『追憶』の有名なセリフを口にすると決めのカット。決めのカットは望遠レンズ。

カメラワークの基礎の基礎（望遠と広角）



出典 <http://ammo.jp/weekly/koh/0208/koh020821.html>



出典 <http://a100.blog.so-net.ne.jp/2006-08-13>

	望遠レンズ	広角レンズ
意味	ズームインの状態。画角が狭い。狭角レンズ	ズームアウトの状態。画角が広い。魚眼レンズ
特徴	被写界深度が浅い(背景や前景がボケやすい) 手振れが目立つ	被写界深度が深い(背景や前景がボケにくい) 手振れが目立ちにくい。手持ち撮影に便利
用途	シリアスなシーン。内面描写	コミカルなシーン。臨場感や空間の広さ(狭さ)を強調したいとき

広角レンズと望遠レンズの使い分けの例

●片山修・宮下健作『パズル』（2008年）第1,2話（2分）

石原さとみの顔アップに注目してください。コミカルなシーンでは広角レンズを多用しているのに対し、シリアスなシーンでは望遠レンズを使った表情アップが多くなります。このドラマでは、広角レンズで石原さとみを撮って、その後ろに男子生徒3人組が映っているという構図が多い。

『ゴッドハンド輝』——円形レールを使った映像演出

●『電車男・もうひとつの最終回スペシャル』（2005年）（20秒）

円形レールについては、言葉で説明するよりも、実際に映像で見てもらったほうがわかりやすいと思います。円形レールで撮った映像と、撮っている様子を同時に見ることができる、貴重なシーンです。

●久保田哲史『医龍』（2006年）第1シリーズ第6話（38秒）

医療ドラマで、手の込んだ映像演出が流行るようになるのは約10年前の『ER』『ナースのお仕事2』『救命病棟24時』あたりからです。手術シーンに円形レールが使われるようになったのは、ここ4～5年だと思われませんが、円形レールを大胆に使って強い印象を残したのが『医龍』です。——余談になりますが、医療ドラマの手術シーンの演出の変遷というのは、面白い研究テーマになるかもしれません。

●下山天『ゴッドハンド輝』（2009年）第2話（24秒）

下山天さんは、空間に対する意識が鋭敏な演出家。『ゴッドハンド輝』では、カメラだけでなく、オペ室全体が回転しているような錯覚を覚える映像になっているので、そこに注目してください。

●下山天『ゴッドハンド輝』第4話（1分30秒）

平岡裕太ではなく院長（渡部篤郎）がオペをするシーンですが、「これぞ下山ワールド」と呼べるような個性的な映像です。下山さんのブログによると、打合せの時にスタッフに伝えたイメージは“潜水艦”だそうです。（1）円形レールによる横の動きに、（2）上下・前後の動き、（3）ズームイン/ズームアウトを加味することによって、カメラが水中を漂っているような不思議な浮遊感が生まれました。あぶく音、水玉模様、青い照明、ジャズ風のBGMなど、他の演出も秀逸。ちなみに、オペ内容は、出産前の胎児を子宮内で手術するというもの。おそらく、下山さんは、「羊水の中→潜水艦」という風に発想したのだと思われます。

●下山天『金田一少年の事件簿』（2001年）単発SP（2分）

下山天さんは、8年前に、松本潤の『金田一少年』の演出をしているのですが、そこでも、円形レールを使った演出や、潜水艦のような浮遊感のあるカメラワークが出てきます。『ゴッドハンド』と同じく、空間を強く意識した映像になっているところにも注目してください。ちなみに、2001年の時点で、こういう映像を撮っていたドラマ演出家（映画は除く）はほとんどいません。



↑『ゴッドハンド輝』の公式サイトから。円形レールのセッティングの様子。

●下山天『ゴッドハンド輝』第2話

●下山天『金田一少年の事件簿』（2001年）連ドラ版のタイトルバック（計22秒）

下山さんのブログによると、『ゴッドハンド』と『金田一』は、CGのスタッフが同じとのことなので、両者のCG映像を並べてみました。確かに、よく似ています。

●下山天『ゴッドハンド輝』（2009年）第2話

第2話では、転倒シーンが2回出てきます。どちらもハイスピードカメラを使ったと思われる、クリアなスローストーション映像になっています。どういう意図で、こんな演出をしたのか、さっぱりわかりませんが……。 (笑)

今期のその他のドラマから

●久保田充『アイシテル〜海容〜』第5話（28秒）

『ゴッドハンド輝』や『金田一少年』など、映像の演出に話が偏りすぎたので、次は、少しでもお芝居の演出に注目してみます。

これは、殺人犯の少年（嘉数一星）が、トラウマになっている過去の事件を告白した直後に登場するシーン。独房の壁にもたれかかって放心しているところが、なんとも斬新です。演出の久保田さんは第5話で、初めてこのドラマの演出に参加したのですが（1,3話は吉野洋さん、2,4話は国本雅広さん）、すでに出来上がっているドラマ世界に、なんとか自分の個性を反映させたいと考えていたはずで、その結果がこのシーンの演出になったと思われます。比較・参考のために、第2,3話の独房シーンも用意しておきます。

ちなみに、久保田さんは、もともとはNHKで朝ドラ『あすか』、『ファイト』、大河『巧妙が辻』などを手がけていた人ですが、何年か前に日テレに転職したみたいで、『斉藤さん』などを演出しています。

●久保田充『アイシテル〜海容〜』第5話（1分45秒）

被害者の姉（川島海荷）が加害者の母親（稲森いずみ）と「あなたが死ねば」というシーン。2人が普通に並べば、稲森いずみの目の位置の方が高くなるのですが、そうならないように（川島海荷の視線が高くなるように）2人の立ち位置を工夫しているところに注目してみてください。

●南雲聖一『ザ・クイズショウ』第5話（1分11秒）

櫻井翔とゲスト（石黒賢）の立ち位置に注目。みのもんたの『ミリオネア』では、司会者と回答者は別々のテーブルで、椅子なしで向い合っていますが、このドラマでは、ひとつの丸いテーブルと一緒に座っています。おそらく、こちらの方がお芝居や演出の幅が広がると、演出家が判断したのでしょう。石黒賢がソッポを向いたり、椅子から立ち上がったたり、櫻井翔が嫌らしい目つきで相手をのぞきこんだりする演技は、ひとつのテーブルと一緒に座っているからこそ、生きる演出です。

●南雲聖一『ザ・クイズショウ』第5話（33秒）

『ゴッドハンド輝』のパロディ『ゴッドハンド雅』のシーン。演出の南雲さんは、8年前に下山天さんと共に『金田一少年』の演出をしていたこともあるので、そうした事情を知っていると、さらに笑えます。

●鈴木雅之『婚カツ!』第5話(2分)

鈴木さんはフジテレビの名物演出家。トリッキーな映像とコミカルな作風に定評があります。このドラマの演出上の特徴としては――、

- (1) 左右対称の構図、壁に対して平行・垂直な(斜めにならない)アングルが異常に多い。
- (2) 上の(1)とほぼ同じことですが、180度反対方向のアングルへの切り返しが異常に多い。
- (3) 構図が左右逆になるカットを交互に繰り返すことが異常に多い。

以上は、鈴木さんの前作『鹿男あをによし』で顕著でしたが、このドラマにも受け継がれています。

●鈴木雅之『婚カツ!』第5話(1分24秒)

上戸彩と上田竜也がバーガーショップで話すシーン。料理のアップから始まって、カメラが上に移動する(ティルトアップ)というカットが連続します。最後だけ、ティルトダウンして、料理のアップで終わります。

●星野和成『BOSS』第6話(32秒)(17秒)(37秒)

天海祐希が志田未来を尋問するシーン。ズームイン/ズームアウトをやたらと多用するのが特徴。同じスタッフだった『離婚弁護士』でも同じような演出をしていましたが、今回はさらにそれを極端にした感じ。

ちなみに、志田未来が、殺された被害者について聞かれて「つきあってたから」と答えるところだけ、別アングル(真横)にして、メリハリをつけています。また、このドラマでは、ジャンプカットも異常なほど多用されているので、参考までにサンプルシーンを用意しておきます。このドラマは、全体的に、ギミック映像を安売りしすぎているような印象を受けます。

●植田尚『白い春』第4話(3分5秒)

パン屋のセットが、大規模でユニークな間取りになっています。喫茶スペース・売り場・厨房が、ひと続きになっていて、カメラ位置に応じて、壁の取り外しが自由にできるようになっているようです。パン屋のセットにこれだけ力を入れるには、それなりの理由があるわけで、このドラマの場合、中盤以降、パン屋のシーンが増えています。